

令和元年6月10日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03128

研究課題名(和文) 東北アジア辺境地域多民族共生コミュニティ形成の論理：中露・蒙中辺境に着目して

研究課題名(英文) Study on the formation of multi-national communal collaborations in the peripheral region of Northeast Asia: the cases of Sino-Russian and Sino-Mongolian border regions

研究代表者

岡 洋樹 (OKA, HIROKI)

東北大学・東北アジア研究センター・教授

研究者番号：00223991

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、18世紀から21世紀初頭の東北アジアの中蒙辺境、露中辺境における人の移動と住民間の共生関係の形成様態を解明した。18世紀の中蒙辺境では活発な人の移動とこれを可能とする社会環境が形成され、移動の波は、19世紀末にはロシア極東に波及した。また20世紀初頭モンゴル国では、ロシア人と漢人の間に税負担回避のための協力関係が見られ、満洲国ではロシア・日本の百貨店が、多民族的な嗜好に対応した経営を行っていた。社会主義体制下で移動は強い管理下に置かれたが、冷戦終了により越境的な人の移動や多文化化が再び活性化した。本研究により大国統治の政治的制約の東北アジアで、活発な人の移動と共生が確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、中国北部・モンゴル・ロシア極東・シベリアにわたる東北アジア内陸部を地域的枠組としてとらえ、17世紀から21世紀初頭に至る時期に関して時期ごとの特徴的事象の検討を通じて、東北アジアにおける人の移動と移住者・現地住民の共生の様態を解明した点に学術的意義がある。近年中国南部等に関して進められている人の移動の研究に対して、異なる自然・社会環境を有する東北アジア北部に関して再検討し、活発な人の移動・交流、そして共生関係の生成が、全期間にわたって確認された点に学術的意義がある。これにより、辺境として停滞的に理解されがちだった東北アジアについての理解を新たに提供する材料を提供した点に社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This project aims at figuring out the historical process and the way of coexistence between migrating people and indigenous inhabitants in the northern peripheral region of Northeast Asia in a diachronic manner. Through the study, active migration of people and their coexistence were observed. The tide of migration began in Mongolia in the 18th century and reached Russian Far East in the end of 19th century. There Mongolian, Chinese and Russian migrants and merchants developed de-facto collaborations each other. In 1930's, Russian and Japanese department stores conducted multi-cultural managements for the consumers of Japan's puppet Manchukuo. Although the demographic movement was put under strict control under the Socialist regimes, the end of Cold War again activized trans-boundary and multi-culturalization. This study revealed actuality of people's trans boundary movement and collaboration under the surface of the political restrictions of the states.

研究分野：東洋史学

キーワード：移動 共生 ロシア モンゴル 中国

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

東北アジアの内陸部は、17世紀前半に現在の中国東北部から勃興したマンジュが、ジュシェン諸集団を統合し、1616年にヌルハチがハンに推戴され、後金国を建国し、1636年までに内モンゴル地域を併せ、太宗ホンタイジは皇帝に即位した。1644年には、明の旧領土を合わせ、ジュシェン、モンゴル、中国本土を合わせた帝国を築いた。一方シベリア征服を進めたロシアは、同世紀半ばには極東に達し、清軍と衝突したが、1689年に清とネルチンスク条約を締結した。これにより、東北アジア内陸部は清とロシアという二つの大国の統治下に入る。両帝国の統治は、20世紀に入って清は中華民国、中華人民共和国、ロシアはソ連、ロシア連邦として受け継がれ、1911年に独立したモンゴル国と共に、現在の政治地図の基本ができあがる。二つの帝国の統治は、それぞれの広大な領域の中で活発な人の動きをもたらした。ロシアではヨーロッパからシベリアへの移民があり、清では万里の長城を越えた漢人の北上が見られた。東北アジアにおける人の移動に関わる研究は、既に戦前の我が国においてモンゴル・東三省への漢人の入植に注目が集まったが、解放後の中国でもこの地域への漢人の流入と定着、農耕開発の進展は多くの研究を生んでいる。また近年は、主に中国南部に関する漢人の南下と現地先住民の移動・共生に関わる研究が蓄積されている。そのような成果として、主に文化人類学分野と歴史学分野の研究者の共同研究をまとめた塚田誠之・瀬川昌久・横山廣子編『流動する民族 中国南部の移住とエスニシティ』(東京、2001年) 塚田誠之編『民族の移動と文化の動態 中国周縁地域の歴史と現在』(東京、2003年) 塚田誠之編『中国国境地域の移動と交流 近現代中国の南と北』(東京;有志社、2010年)がある。東三省への漢人移民については荒武達朗『近代満洲の開発と移民 渤海を渡った人々』(東京、2008年)がある。また地域研究分野でも、栗田和明編『移動と移民 複数社会を結ぶ人びとの動態』(東京、2018年)に中国に関わる論文が収録されている。またロシアに関しては、19世紀から20世紀初めにかけての極東ロシアへのアジア移民の導入政策を研究したイゴリ・R・サヴェリエフ『移民と国家 極東ロシアにおける中国人、朝鮮人、日本人移民』(東京、2005年) 社会主義崩壊後のロシアにおける中国人・中央アジア移民を経済学の立場から研究した堀江典生『現代中央アジア・ロシア移民論』(東京、2010年)がある。しかし以上の研究では、中国、ロシアの事例の研究が個別に行われていて、地域における移動の全体像の歴史的把握が十分ではない。本研究では、中国北部からモンゴル、ロシアのシベリア・極東を視圏として、関連研究者による共同研究を行った。

### 2. 研究の目的

本研究が目的としたのは、17世紀から21世紀初頭に至る、東北アジア内陸部(ロシアのシベリア・極東、モンゴル、中国北部)を歴史的な人の移動圏として捉え、この地域における人の移動と、移動先での人の共生の様態を研究することによって、この地域における移動の特徴を歴史的・現代的に把握することにある。人の活発な移動が、中露の二大国が支配を確立した17-18世紀に始まることに着目し、清朝の北方領域であるモンゴル辺境地帯と、中露国境地域を二つの研究エリアとして設定して研究班を編成し、それぞれ共同研究を行った。「中蒙辺境班」は、研究代表者岡洋樹が清朝統治下のモンゴルを、橘誠が清朝滅亡後20世紀初頭のモンゴルを、広川佐保が20世紀後半のモンゴルにおける人の移動と共生をめぐる問題をそれぞれ検討した。一方「中露辺境班」では、イゴリ・R・サヴェリエフが19世紀から20世紀初頭にかけての極東、藤原克美が1930年代から40年代の満洲国、堀江典生が社会主義後のロシアを対象として研究を行った。東北アジアにおける人の移動の研究は、漢人の北上に関する研究や、シベリアの労働移民の研究など、個々の国における事例がそれぞれ別個に研究されてきた面があり、また近年の移民研究も、中国南部が中心となっており、モンゴル、ロシアを含む北方に関する研究がやや手薄なように思われる。また東北アジアを地域的枠組みとした通時的研究が求められる。それゆえ本研究は、特定の国に特化するのではなく、中国北部からロシアに至る地域を研究の視圏として設定することで、これまでの東北アジアの移民研究に欠けていた側面を明らかにするとともに、各事象を歴史的な一貫性において捉え直すことを目指したのである。

### 3. 研究の方法

本研究に参加したのは、モンゴル史、ロシア史、東北地方史をテーマとする歴史研究者と、現在のロシアにおける移民をテーマとする経済学者である。また本研究の遂行に当たっては、4年間の研究期間の内、第一、第二年目を「文献研究期」とし、それぞれの分担テーマに関して、国内及び露・中・蒙三か国での史料調査を行った。その成果を踏まえて、第三年目は「対話研究期」とし、主に露・中の研究者を招いたシンポジウムを開催し、現地での研究を、直接対話で摂取することに努めた。第四年目を総括研究期と、研究成果をまとめた。観点としては、18世紀から現在にいたる東北アジアで展開された人と物の移動と形成された自生的・複合的コミュニティの形成過程と相互の関係のあり方の解明を目指した。これには二つの局面が想定される。一つは、18世紀以後に進行した中国からの移民流出に伴う、移住先の自生的社会関係基盤形成の事例研究である。19世紀末以後には、移民の流れは露中国境をまたいで進展し、この越境移動が移民を巡る新たな共生関係を生み出した。またロシアの南下により中国東北部やモンゴルでロシア移民と現地の漢人・モンゴル人の間に共生関係が生み出された。20世紀後半には中ソの社会主義体制がこの地域を支配したが、この時代の人の移動は、従来未解明である。さらに20世紀末におけるソ連社会主義体制の解体とモンゴルの民主化は、国境を越えた労働力や資本の移動を再度活性化しており、その特徴が歴史的なこの地域の移動といかなる特徴を共有し、また異なる性格を示すのかも研究の課題となっている。こ

の地域の移動は、国境や行政区画の越境だけでなく、中国の定着農耕文化とモンゴルの遊牧文化、さらにロシアの文化という大きな文化的差異をもつ諸地域に跨る人の移動となっており、共生関係が文化的に多大な多様性を越えて進展するという興味深い特徴も有している。本研究は、東北アジア内陸部における移動と共生の歴史的連続性と、文化的越境性という地域の特徴を背景に進められたのであり、この点でも学術的な興味の尽きない課題となっている。

#### 4. 研究成果

清代のモンゴルを担当した岡洋樹は、18世紀を中心として、モンゴルにおける人の移動の様態を再検討した。当時のモンゴルへは、中国北部から膨大な漢人移住が進み、研究者の注目を集めてきた。一方本来の遊牧民としてのモンゴル人の移動性は清の「封禁政策」により著しく低下したとされてきた。しかし岡は、家畜窃盗事案の題本を用いて、家畜窃盗犯が犯行に及ぶ過程で、原属旗から離れ、帰化城・伯都訥・斉齊哈爾等の都市や周辺農村に移動して、出稼ぎ労働や交易、あるいは巡礼に従事していることを明らかにした。これによって、モンゴル人が漢人同様の活発な移動を行っていたこと、出稼ぎ労働や交易のネットワークが人の移動を支える条件として形成されていたことを明らかにした。これは続く近代における国境を越えた中国からロシアのシベリア・極東への労働力移動の社会的環境条件が形成されていたことを意味する。続いて橋誠は、1911年に独立を宣言したモンゴル国での税徴収をめぐる、清代以来の経済力をもつ漢人商人と、モンゴル政府から商業税免除特権を得たロシア商人が、名義貸しなどの協力が生み出されていたこと論じた。イゴリ・R・サヴェリエフは、19世紀末から20世紀初頭における極東ロシアへの移民労働力の導入を、主にロシアのアーカイブ史料を用いて研究した。ロシア当局は、ロシア人労働力の決定的な不足から、中国・朝鮮・日本からのアジア移民の導入政策を採った。しかしアジア移民の導入は、当局者の間に外国人に対する警戒を生じさせ、外国人の雇用禁止法が制定されるが、ロシア国籍の労働者を確保できない場合の移民労働力の雇用を認める例外規定を含んでおり、移民の利用は引き続き行われた。この知見は、圧倒的な労働力不足という、東北アジア内陸部に通底する条件が、移民の導入を不可避とした事情を鮮明に示す。藤原克美は、中国東北部ハルビンに設立されたチューリン商会の活動を研究した。チューリン商会は、当初ロシア資本により設立されたが、その後外国資本を導入しつつ、中華民国期から日本の満洲国期に営業を行った。藤原の研究は、百貨店を手掛かりとして、植民地経済の多様な消費動向を捉えたものである。ハルビンにはほかに、日本資本の登喜百貨店や丸商百貨店が競合し、チューリン百貨店は、ハルビン上流層のファッションと消費を牽引し、日本の百貨店は日本商品を扱い店舗の構成や販売方法も日本式だった。この知見は、植民地特有の文化的多様性と多民族社会のあり方が、百貨店経営に反映していたことを示す。広川佐保は、社会主義体制下のモンゴル人民共和国で、1982年に発生した在住中国人の追放事件を扱った。中ソ対立前、中国はモンゴルに多数の労働者を送り込み、支援を行った。しかし中ソ関係の悪化により、労働者の多くは帰国したが、かなりの数の中国人がモンゴルに残留した。モンゴル政府は、1982年、突如在留中国人の追放を行い、これによりモンゴル在留の中国人が本国に帰還することになった。彼らは元々の出身地方に戻るようになったが、現在なお貧困に苦しむ者が多いという。広川の研究は、社会主義期において、労働力の移動が国家の強い関与によって実施され、移住者の運命も国家の政策によって左右されたことを示している。1930年代のソ連でも強制労働や強制移住による人の移動が見られたのであり、社会主義体制が、人の移動と移動による共生関係の形成を大きく制約したことが知られる。堀江典生は、1990年代初頭のソ連社会主義体制の崩壊後におけるソ連への中国・中央アジアからの労働移民を扱った。堀江は、中国からの労働移民に対するロシア側のゼエノフォビクな反発を検討しつつ、その警戒には必ずしも根拠がないこと、またロシアの中国人移民をディアスポラと規定することに否定的な見解を提示している。堀江は、ロシアでは、「チャイナ・タウン」と呼ばれる中国資本のマーケットが、中国人だけでなく、中央アジア等の移民労働者や商人が集まる場となっており、移民の多国籍化が見られることを指摘している。

以上の東北アジアにおける移民の歴史的・現在の様態に関する研究から、次のような理解を導くことができる。第一は、モンゴルやロシアのシベリア・極東は、歴史的に希薄な人口と低生産性を抱えており、外部からの移民が流入しやすい環境にあるということである。中国からの労働移民は、時代を通じてこの環境を背景として北上しており、社会主義体制成立までその波は蒙中辺境から露中国境へと広く及んだ。20世紀前半の戦争による混乱にも拘わらず、移民の流入によって多文化的な状況が形成され、国家の政策とは別のところでデファクトな共生関係が形成された。第二に、社会主義期は国家管理が社会の隅々まで及んだ特異な時代であり、この時期には国家の強い管理下で人の移動が管理され、デファクトな共生関係の形成は抑制された。第三に、社会主義体制崩壊後のモンゴル、ロシアで、18世紀以来の人の移動が再び活発化している。特に体制転換後のシベリア・極東からの人口流出は、再び移民労働力の需要を高めた。移民の存在は、受入側の警戒感を生む一方で、多文化的なデファクトな共生関係をも生み出しているのである。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計24件)

松野周治・堀江典生・三村光弘「鼎談：北東アジア経済圏の現実と展望」『経済』281、2019、109-130頁

Hiroki Oka. The Mobility of Mongolian Banner Subjects in the Mid-Qing Era. Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko. 76, 2019, pp. 1-33.

堀江典生「ロシアにおける出稼ぎ労働の規制とその背景」『ユーラシア研究』53、2015、72-74 頁  
堀江典生「壁の向こう側：中央アジアから来た建築労働者たちの労働と暮らし」『ユーラシア研究』57、2018、27-31 頁

Norio Horie. Community maintenance by migrant workers in rural Tajikistan. Миграционные процессы: проблемы адаптации и интеграции мигрантов. 2018, стр.163-168.

堀江典生「海外に活路を見いだす出稼ぎ労働者たち：その暮らしと故郷との絆」『ウズベキスタンを知るための60章』2018、312-316 頁

Norio Horie. The Positionality of Russia's Far East Border Regions. Problems of Economic Transition. 59-10, 2018, pp.753-767.

Igor Saveliev. Chinese Labor in the Russian War Effort. Slavica, 2018, pp.259-282.

サヴェリエフ・イゴリ「革命の人質——ロシアにおける中国人契約労働者、1916-1918年」『ロシア史研究』102、2018、67-80 頁

Saveliev Igor. Homeland and Diasporic Space: Transnational Practices of Central Asian and Sakhalin Koreans. Eurasia Border Review. 9, 2018, pp. 29-44.

橋誠「清朝崩壊後のモンゴル・チベット関係——蒙蔵条約の同時代的意義に着目して——」『下関市立大学論集』62-1、2018、71-83 頁

藤原克美「1930年代チューリン百貨店のロシア人」『セーヴェル』34、2018、85-99 頁

Норие Хорие. Позиционирование приграничных районов Дальнего Востока России в экономической и социальной структуре региона: происходящие перемены. ЭКО, 3 (2017), 2017, стр. 21-36.

広川佐保「20世紀初頭、内モンゴル東部における『文契』と『地券』——ハラチン右旗土地文書を中心に」『西域歴史語言研究集刊』9、2017、419-436 頁

Tachibana Makoto. Vil'sony tsag uye ba Mongolyn khuv' zaya. undestnij oortoo zasan tohinokh zarchmyn tukhai. Mongol sudlal ba toghtovortoj hogjil. IV-V, 2017, pp.71-79.

堀江典生「労働市場にみるロシアの経済危機対応力とその限界」『ロシア・ユーラシアの経済と社会』No.1007、2016年、2-15 頁

Norio Horie. Path-Dependency in Transition Economies: Searching for a New Agenda. Journal of Comparative Economic Studies, 11, 2016, pp.5-9.

サヴェリエフ・イゴリ「日本対外政策におけるブリティッシュ・コロンビアへの日本人移民、1898-1908年」『アジア太平洋地域の諸民族の社会・文化交流』2016、25-37 頁

広川佐保「内モンゴルから見たハルハ・モンゴル——『ムグデニー・モンゴル・セトゲール（奉天蒙文報）』をもとに——」『昭和女子大学国際文化研究所紀要』22、2016、27-32 頁

広川佐保「新潟県の満洲移民関係資料——新潟大学付属図書館所蔵木村家文書」『近現代東北アジア地域史研究会 News Letter』28、2016、48-60 頁

① Норие Хорие, Константин Григориев. Эволюция китайских рынков в Сибири: пересборка “китайскости” и открытие “закрытых” локальностей. Этнические рынки в России: пространство торга и место встречи. 2015, стр. 141-158.

② Saveliev Igor. Borders, borderlands and migration in Sakhalin and the Priamur region: a comparative study. Voices from the Shifting Russo-Japanese Border: Karafuto / Sakhalin. 2015, pp. 42-60.

③ 広川佐保「チンギス崇拜」と近代内モンゴル」『チンギス・カンとその時代』2015、339-355 頁

④ 広川佐保「建国大学とモンゴル人——モンゴル人成年の模索と挫折」『内モンゴルを知るための60章』2015、211-215 頁

〔学会発表〕(計29件)

サヴェリエフ・イゴリ「第一次世界大戦期の在露中国人の越境的空間」シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」2019年1月27日、富山、富山大学

橋誠「モンゴル国における関税をめぐる露中の『交渉』——20世紀初頭の外交と多民族共生——」シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島問題、中露国境、蒙中辺境」、富山大学、2019年1月27日。

広川佐保「近代モンゴルに暮らした漢人の歴史 - 「旅蒙商」から「労働者」そして「蒙古帰僑」へ」シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」、2019年1月27日、富山、富山大学

藤原克美「満洲国における百貨店の役割」シンポジウム「北東アジアの鳴動：朝鮮半島、中露国境地域、蒙中露辺境」、2019年1月27日、富山、富山大学

Saveliev Igor “The Recruitment of Chinese Contract Workers by the Murmansk Railroad in Northeast China during WWI”. International Symposium “Interaction models in East Asia in the XX-XXI centuries: Sociocultural and international dimension. Sankt-Peterburg State University, 2019.1.12, Sankt-Peterburg, Russia.

Oka Hiroki. “Imperial Rule and Migrants: The Qing’s governance on the cross-boundary activities of migrant people in Mongolia”. The 16th Annual Meeting of the Northeast Asia Academic Network (NAAN), 2018.11.9, Toyama, University of Toyama.

Horie Norio. “Community Maintenance by Migrant Workers in Rural Tajikistan”. Migration Processes: Migrants Adjustment and Integration Issues. 2018.10.2, North-Caucasus Federal University, Stavropol,

Russia.

Horie Norio. “GATS Mode 4 in Russia’s Migration”. International conference “Evolution of International Trading System: Prospects and Challenges”, 2018.10.25., Sankt-Peterburg State University, Sankt-Peterburg, Russia

Oka Hiroki. “Manjijn khuul’ es kheregiseniy uchir”. Evraziyn nuudelxdiyn tuukhen zammal: tor, niygem, soyol. 2018.9.6-7, Ulaanbaatar

Hirokawa Saho. “Mongold orshin suugch gadaad har’yaat nar: gazryn asuudald kholbogdokh XX zuuny tuukhen survaljuudaas”. The 11th International Symposium in Ulaanbaatar “Kyakhta and Khuriye: From the Viewpoints of Eurasia”. 2018.8.31, Ulaanbaatar, Mongolian National University.

Tachibana Makoto. “Mongol dakh’ Dalay lamyn sangijn uil ajillagaa: Khanddorj vangijn oriyn jisheen deer”. Olon ulsyn erdem shinjilgeeniy khural. Mongolchuudyn XX zuuny ekh tyykh, ov soyol, unet zuil. 2018.8.18, Ulaanbaatar.

Oka Hiroki. “Sharing life at the bottom: “Slaves” in the Qing era Mongolia”. 第四届清朝与内亚国际学术讨论会、2018年6月30日—7月1日、长春、东北师范大学

Saveliev Igor. “Reconstructing Space: A Korean-Village Project in Russia’s Primor’e”. International Conference “Community Maintenance in Periphery”. International Conference ‘Community Maintenance in Periphery’, International Institute for Okinawan Studies, University of Ryukyus, 2017.12.16, Naha, Japan.

Horie Norio. “North Korean migration in the context of Russia’s reorientation towards Asia”. International conference “Migration Bridges in Eurasia”, 28 November, 2017, MGIMO-University.

サヴェリエフ・イゴリ「革命の人質——ロシアにおける中国人契約労働者 1916-1918」第61回ロシア史研究会年次大会、2017年10月14日、東京、東京大学

広川佐保「近代内モンゴルとチンギス崇拜」内蒙古師範大学学術講座、2017年9月11日、呼和浩特、内蒙古師範大学

Hirokawa Saho. “The Establishment of the Ulaanchab League and Its Function”. 抗日戦争時期的内蒙古国際学術討論会、2017.9.9, 呼和浩特、内蒙古師範大学.

Oka Hiroki. “The Demographic Movement in the Qing Era in Mongolia: Prelude to the Modern Migration”. Symposium: Migration Bridges in Eurasia. 2017.9.6-7, Sendai, Tohoku University

Horie Norio. “Addressing Chinese and North Korean Labour Migration in th Context of Russia’s Reorientation to Asia”. Symposium: Migration bridges in Eurasia: Political, socio-economic, demographic and historical perspectives for Northeast Asia, Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2017.9.6-7, Sendai, Japan.

Saveliev Igor. “The Demarcation of the Eastern Border of the Russian Empire and the Space of Chinese Migration (1858-1900)”. Symposium: Migration bridges in Eurasia: Political, socio-economic, demographic and historical perspectives for Northeast Asia, Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University, 2017.9.6-7, Sendai, Japan.

① Tachibana Makoto. “Conflict and Coexistence over Taxation in Early 20th Century Mongolia: System and Reality”. Symposium: Migration Bridges in Eurasia. 2017.9.6-7, Sendai, Tohoku University

② Fujiwara Katsumi. “Shrinks of the Russian Colonial Space in Harbin under 1930s: From the Minutes of Churin Company”. Symposium: Migration Bridges in Eurasia. 2017.9.6-7, Sendai, Tohoku University

③ Tachibana Makoto. “Offerings, Moneylending, Taxation: Tibetans and Money in early 20<sup>th</sup> century Mongolia”. Association for Asian Studies in Asia. 2017.6.24, Seoul, Korea University.

④ 岡洋樹「清代中期の家畜窃盗事案からみるモンゴルにおける人の移動と共生」東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「共生の東北アジア：中蒙・中露辺境を事例として、2016年2月13日、仙台、東北大学東北アジア研究センター

⑤ サヴェリエフ・イゴリ「戦前の極東ロシアへの中国人の移住と第一次世界大戦期の北西ロシアにおける中国人契約労働者」東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「共生の東北アジア：中蒙・中露辺境を事例として、2016年2月13日、仙台、東北大学東北アジア研究センター

⑥ 藤原克美「満洲国下のチューリン商会における多民族共生」東北大学東北アジア研究センターシンポジウム「共生の東北アジア：中蒙・中露辺境を事例として、2016年2月13日、仙台、東北大学東北アジア研究センター

⑦ 橋誠「世界史中的の外蒙撤治問題」多言語史料背景下的西北研究青年学者会議（招待講演）2015年11月14日、上海、復旦大学

⑧ 橋誠「1919年の東アジア国際環境とモンゴル：大モンゴル国運動と外蒙自治撤廃」平成27年度広島史学研究会大会、2015年10月25日、広島、広島大学

⑨ Тачибана Мақото. “Вопросы и проблемы Кяхтинской конференции: пути их решения”. Международной конференции “На границе народов, культур и миров.” 2015.9.10, Kyakhta, Russia.

〔図書〕(計2件)

サヴェリエフ・イゴリ『白海における中国人——労働移民の歴史、1915-1919年』(ソユーズ・デザイン社)2017年(ロシア語)

Saveliev Igor. “Chinese Labor in the Russian War Effort”, David Wolff, Yokote Shinji, Willard Sunderland (eds), Slavica, Bloomington: Indiana, 2018年9月, pp. 259-282.

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：堀江 典生  
ローマ字氏名：(HORIE Norio)  
所属研究機関名：富山大学  
部局名：極東地域研究センター  
職名：教授  
研究者番号（8桁）：50302245

研究分担者氏名：サヴェリエフ イゴリ  
ローマ字氏名：(SAVELIEV Igor)  
所属研究機関名：名古屋大学  
部局名：大学院国際開発研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：60313491

研究分担者氏名：藤原 克美  
ローマ字氏名：(FUJIWARA Katsumi)  
所属研究機関名：大阪大学  
部局名：大学院言語文化研究科  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：50304069

研究分担者氏名：橘 誠  
ローマ字氏名：(TACHIBANA Makoto)  
所属研究機関名：下関市立大学  
部局名：経済学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：30647938

研究分担者氏名：広川 佐保  
ローマ字氏名：(HIROKAWA Saho)  
所属研究機関名：新潟大学  
部局名：人文学部  
職名：准教授  
研究者番号（8桁）：90422617

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。